

麦との作付体系におけるハトムギの安定直播栽培

矢野雅彦・尾形武文・田中昇一・藤井秀明 (福岡県農業総合試験場)

Masahiko YANO, Takefumi OGATA, Shoichi TANAKA and Hideaki FUJII : Stable Direct Sowing Culture for Job's Tears (*Coix lacryma-jobi* L. var. *frumentacea* Makino) after Wheat Cropping

麦(主に小麦)―ハトムギ直播栽培の作付体系におけるハトムギの播種期は麦収穫後の6月中旬が中心となる。この麦後直播ハトムギの安定栽培法を確立するため、品種、栽植密度、窒素施用法について検討したのでその概要を報告する。

1. 試験方法

1) 品種選定試験 播種密度は m^2 当たり、12.3株、窒素は a 当たり2kgを施用し、第1表に示す7品種を供試した。

2) 栽植密度及び窒素施用法試験 中里在来を用い、6月中旬播きで、第1図に示すような栽植密度及び窒素施用量について検討した。

2. 結果及び考察

1) 品種選定試験 麦―ハトムギの作付体系におけるハトムギの播種時期は6月中～下旬で、収穫時期は後作麦を考えると、遅くとも11月上旬までに終了することが必要である。また、管理作業や、収穫時の機械適応性からみて草丈の低い品種、さらには収量性や品質等を考慮した結果、中里在来が早熟で草丈が低く、収量も安定しており最も有望であった。徳田在来は1/重が軽くなる場合もみられたが草丈が低く、安定した生育・収量を示し、実用性は高いと考えられる。晩生に属する岡山在来は、6月中旬播きであれば多収を示すが、播種期が遅れた場合、熟期の遅れや、減収程度が大きかった。

2) 播種密度試験 株間18cmの場合、条間が45cmで最も多収となった。条間を68cmに広げた場合、45cm区に比べ減収程度は7%程度で、草丈は低くなり、条間を広げることで中耕機や防除機械等による管理作業が容易となる。このことから70cm程度の条間でも十分実用性がある。条間を90cmまで広げると、生育量が不足し、収量の低下が大きい。条間30cmでは密播による徒長、過繁茂による減収がみられ、管理作業面でも不利な点が多かった。

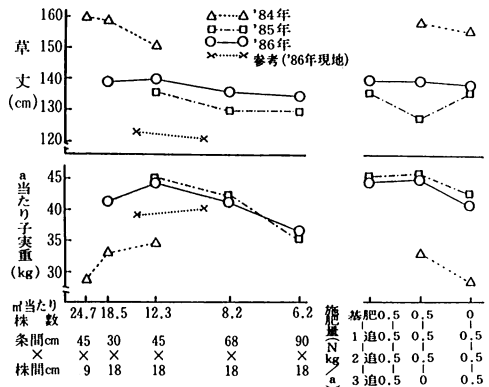
3) 窒素施用法試験 基肥施用の有無についてみると、無施用区は施用区に比較して草丈の抑制につながらず、 m^2 当たり分枝数が減少し(データ略)収量は低下した。第3回追肥の有無については、生育及び収量にほとんど差はみられなかった。このことから、第3回追肥は必要ないともいえるが、地力の低い圃場や、肥料の流亡の大きい場合、追肥の3回施用が必要であり、特に、3回目の追肥は葉枯病に対する軽減効果もみられる。

3. まとめ

麦との作付体系におけるハトムギの6月中～下旬の直播栽培では、早生で安定した収量性をもつ中里在来、徳田在来が適する。播種密度は、株間18cm前後、条間は45～70cmが適当であり、条間は播種時期の早晩や、中耕除草機等の機械作業に適するように45～70cmで設定する。 a 当たり窒素施用量は基肥0.5kg、出穂期に第1回追肥0.5kg、その後10～15日間隔で0.5kgを2回施用する。

第1表 品種と生育・収量

年次	播種期	品 種	成熟期	草 丈	a 当たり穀実重	同左比
'85	6.13	中里在来	10.20	136	44.5	100
		徳田在来	22	126	46.2	104
		愛媛1号	27	172	44.1	99
		宮城在来	27	169	45.5	102
		光 州	29	155	48.4	109
		MATO GROSS	11.5	164	42.1	95
		岡山在来	7	166	47.1	106
'86	6.19	中里在来	10.16	142	44.2	100
		徳田在来	17	131	44.3	100
		光 州	22	158	42.2	95
		岡山在来	11.3	171	44.5	101
	6.30	中里在来	11.8	146	35.6	100
		岡山在来	27	153	27.8	78



第1図 播種密度・施肥量と生育及び収量 (中里在来, 6月中旬播)

引用文献

1) 乙藤まり・吉村大三郎・吉田桂輔・高崎登美男:九州農業研究, 48, 146, 1986